バレエの交差点～シアター・ノート

連載コラム ⑥

贈る季節に

ヤング靖子

クリスマス・イルミネーションが表紙を飾る今月号を手に取られて、もう12月かと呟く方もいらっしゃることでしょう。初めて真夏のクリスマスを過ごされるご予定の方も多いと思います。

日常生活の全てが「新型コロナウイルス(COVID-19)感染対策」という“非日常”の中、初めてのことが多い一年でしたが、先日、初めて新聞のインタビューを受けるという経験を致しました。シンガポール最大の新聞The Straits Timesの特集記事の題名は“The Show Must Go On”(イギリスのロックバンド、Queenの歌にもありましたね)。「ハプニングがあってもショーは続けなければならない」という意味が転じて、「何があっても進まなくては」というニュアンスで使われる慣用句です。記事はパフォーマンスの機会を失った芸術団体が、減収を補うためにどのような取り組みを行ってきたかを紹介する内容で、私は「コロナ禍になぜ芸術を支援するのか」という質問を頂き、お話ししました。私がシンガポール人ではないことも先方には興味深かったようです。このご時世ですから電話でのインタビューでしたが、初対面の方とテーマを持ってお話するのは緊張しつつも貴重な経験でした。

「商業芸術」という括りの中には、プロバレエ団であるシンガポール・ダンス・シアター(SDT)の他にも、オーケストラをはじめとする音楽関係の団体、劇団や画廊等も含まれます。通常ですと、富裕層の厚いシンガポールらしく、多くの団体が年1回資金調達のための豪華なガラ(Gala:祝祭を意味するフランス語、転じて特別なディナーパーティー)を行い、社交欄を賑わせますが、今年はそうしたパーティーも中止に追い込まれ、イベントや公演の場所の閉鎖でチケット収入も絶たれ、先行きの見えなかった6月までは、各団体ともに活動資金の確保は大きな課題となっておりました。

ところが、アートとは面白いもので、フェーズ2に入ると大雨の後に小さな芽が出てくるように、ユニークな資金調達のためのイベントを見かけるようになりました。

自宅に有名レストランからディナーが届けられ、ZOOMで鑑賞するお芝居やコンサート。有名画家に寄贈された作品を集めたチャリティー・オークション。ソーシャルディスタンスを守った少人数のセルフツアーなどなど、それぞれが趣向を凝らした内容です。若い地元アーティストが描いた比較的廉価な作品の他にも、有名アーティストとのランチやレッスンを受ける権利をオークションに出品した美術館もありました。

SDTでは、7月にオンラインで「ヴァーチャル・ガラ」を行いました。申し込むと前日にプログラムとダンサーによる手書きのサンキュー・カードと共にシャンパンとチョコレート(某有名店からのご寄付でした)が届きます。当日はZOOMで、パトロンのTony Tan前大統領、Grace Fu環境大臣、会長、芸術監督の挨拶、バイオリン演奏の後、スタジオでのパフォーマンスを鑑賞し最後にみんなで乾杯、というプログラムでした。バレエもソーシャルディスタンス仕様で全員が踊る新作を含め2作品が披露されました。Fu大臣は「組閣後で、もう文化担当大臣ではありませんが、このイベントだけは私が出る!と押し切りました」とにこやかにスピーチをされ、応援して下さるお気持ちが伝わりました。いつもは劇場で見かけるご贔屓さん達のお顔も久しぶりに見る事ができ、スクリーン越しに挨拶を交わしました。

ヴァーチャル・ガラより新作「セレブレーション」(撮影Jacky Ho)

冒頭の「コロナ禍にあって、なぜ芸術を支援するのか」という質問は、皆様でしたら、どうお答えになるでしょう。コロナ以前は特に意識しなかった問いは、簡単そうで実は難しい質問です。きっと様々なお答えが返ってくると思います。私自身は、日本語で言う「ほんの気持ちです」という気持ちと言いましょうか、舞台芸術を支援するという大層な話ではなく、外国人の私なりにシンガポールを応援したかったし、異国で頑張っている若いダンサーの一人一人に気持ちを伝える代わりに、出来ることをしようと思いましたと答えました。とは言え、カンパニーから届いた手書きのお礼状を読むと、こちらの方が前向きな気持ちを贈られた気がいたします。

Goh Choo San作「シューベルト・シンフォニー」(撮影Bernie Ng 2018年)

10月29日に行われたワールド・バレエ・デーの一コマ
世界的なバレエ団がオンラインで集合

今年、SDTのJanek Schergen芸術監督がシンガポールの芸術に関する様々な支援や助成を行うNational Arts Council (NAC)よりFriends of Artという賞を授与されました。受賞インタビューで監督はこんな風に話しています。「芸術を支援するというと金銭的な支援を思い浮かべる方が多いかもしれませんが、劇場に足を運んで頂くこと、そこに貴方がいらっしゃることが、私たちにとっては大きな支えです。」

1月にスタジオで収録された南十字星4月号インタビューの様子
右から二人目が Janek Schergen芸術監督

The Straits Timesによると、ほとんどの芸術団体が予想以上の支援を受け、応援メッセージも数多く寄せられたそうです。応援したいと感じさせるようなアーティストとお客様との間の垣根の低さは、この国のアートシーンがまだ若く、これからの分野であることを示していると感じます。今年は芸術界全体に不要不急のレッテルが貼られその活動が制限された年でしたが、暮らしの中にどんな形態であれアート的な要素が消えると寂しいもの、と実感したのは収穫のように思います。

ところで、支援を必要とするのは芸術分野に限りません。シンガポールでは政府が実業に注力する傍ら、芸術や福祉は民間の力に任されている部分があり、多くの民間団体が貧困家庭、動物愛護活動、外国人労働者、医療活動といった社会問題に取り組んでいます。日本人会にもボランティアのグループがありますね。こうした団体へのオンライン寄付やボランティアを募集するプラットフォームであるGiving SG*に寄せられた善意は、フェーズ1期間中に過去最高額を記録したそうです。シンガポール・コミュニティの心意気を感じます。

2020年は会員の皆様にとっても、日本から離れた当地で、コロナ禍で全力を尽くした1年だったのではないでしょうか。締めくくりの月を迎え、皆様からSDTに頂いたご支援、ご声援に心より感謝申し上げ、クリスマスの平安と新しい年のご多幸をお祈りいたします。良いお年をお迎え下さい。

*Giving SGは$10の少額から寄付することができます。シンガポールのコミュニティへクリスマス・スピリットのお裾分けにお勧めのサイトです。
https://www.giving.sg

画像提供 Singapore Dance Theatre

プロフィール/近況::ヤング靖子
Ambassadors Council of Singapore Dance Theatre
補習校でお箏の演奏を聴きました。生演奏の音がしみじみ心に響きました。SDTでも生の音や踊りを皆様に楽しんで頂ける日を目指し、安全にご覧頂くための様々な取り組みが続いています。

2020年唯一のフル・スケール作品となった「ロミオとジュリエット」より　両家和解のエンディング・シーン